ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「いやー、助かったよ。いつもありがとう」

　ここは商店街。狭い店内で、俺に荷物の搬送作業を頼んだ店の人は、ニコニコしながら俺に言う。一度マンションに戻った俺は、白いＴシャツ一枚、黒いジーパンという、ラフなスタイルだ。

「これぐらい、お安い御用ですよ。斉藤さんも、早く腰、治してくださいね」

　俺が斉藤さんと呼ぶその人は、そろそろ体型と髪の量が気になり始める年齢のおじさんだ。腰に巻いた包帯が痛々しい。先日転んで、腰を打ってしまったそうだ。店番はともかく、これじゃ搬送作業は無理なので、こうして俺に頼んだらしい。ちなみに元気な時でも、年末などの忙しい時期には、俺達に搬送作業を頼むことがある。下手にバイトを雇うより、俺達に頼む方が仕事がるらしく、また、金もかからない。『ワルキューレ』は、表向きは『煌く乙女』という、ただのボランティア団体だからだ。斉藤さんや、他の依頼者からしてみれば、一石二鳥なのだろう。

　斉藤さんから頼まれた仕事を終えた俺は、『呉服屋中村』に向かう。まぁ、向かうといっても、ほとんど目と鼻の先だが、搬送作業に少し時間がかかってしまったので、俺は店まで走る。ええっと、確か倉庫の整理……だっけ？

　今日の朝、レイに言われたことを思い出しながら、俺は店の人に挨拶をして、裏口近くにある倉庫に入る。

　商店街の倉庫と言っても、中は広い。倉庫の整理の依頼は定期的に引き受けるので、ここには十回以上入っているが、最初に来た時は驚いたものだ。多くの店が連なる中、まさかこんな大きな倉庫が商店街の中にあるとは全く想像していなかった。ましてやここは呉服屋。一体、倉庫に何をしまうのか、不思議でならなかった。この謎は、すぐに解き明かされたが。

「悪い、ちょっと遅れた」

「あっ、ロラン。お疲れ様です」

「私達も、ちょっと前に来たばっかりだから、気にしなくていいよ」

　当然のことながら、詠と樹葉はすでに倉庫の整理を始めていた。二人共、俺と同じ格好をしている。俺は、倉庫の中を見渡した。地球じゃ見ることの出来ない植物や、鉄に似た塊が、いたるところに置かれている。もうお分かりだろうか。

　この店は、異次元空間『トラース』から持ってきた物質を扱っているのだ。この商店街で唯一、『ワルキューレ』の人間が経営している。

　もちろん、一般人に販売するのは、普通の商品だ。だが、客が『ワルキューレ』に所属する人間の場合、ここはその時だけ、『呉服屋』ではなく、『トラース』での戦闘で使用する武器や防具等を強化・整備・販売する『武器屋兼鍛冶屋』に変わる。似たような店は他にもいくつかあるが、ここら辺に住む『ワルキューレ』の住民は、ここで装備を整えている。俺達が『トラース』で使用する武器や防具も、ここでオーダーメイドしたものだ。唯一の例外が、俺の『ヘヴンズ・ギア』と『ヘルズ・ギア』である。

　そういえば、俺はあの二本の刀を作った刀工が誰か知らない。刀のどこにも、銘がないのだ。あんな見事な刀、よもや、どこかに落ちていたわけがあるまい。

「いつも通りにやればいいのか？」

　俺は、この中で一番背の高い植物の植えられた鉢を両手で持ち上げながら、樹葉に聞くと、彼女はコクンと頷いた。俺は、その鉢を、倉庫の隅へと持っていく。基本的には、よく使うものを入口の近くに、あまり使わないものを倉庫の隅に置く。但し、植物だけは例外だ。今俺が運んでいるこいつも、葉っぱは良質な潤滑油になるので、よく使うらしいが、いつも倉庫の隅に置かれている。その理由は、こいつが『トラース』から持ってきた『植物』だからだ。鉄に似た塊とかとは違い、あくまでも植物だから、当然生きているし、育つ。ものによっては、いきなり急成長して、朝起きたら倉庫の入口を塞いでいることもあるらしい。地球と『トラース』はよく似ているが、細かい点で違うところも多いので、そういうこともあるだろう。

幸い「突然変異を起こして人を襲う」といった事例は今のところ無い。今後も無いとは言い切れないが、お姉様が、『トラース』から持ってきた植物は一ヶ月以内で全て使い切るよう命じているので、あまり心配はないはずだ。

「そういえば、詠ちゃんのところ、入学式はどうだった？」

　俺が、よく分からない変な形をしたブヨブヨの塊を運んでいる時、突然樹葉が詠に聞くと、詠は苦笑いを返す。

「ちょっと騒ぎになっちゃいましたね……先生に、制服間違ってるぞって言われちゃいました。男だって言っても信じてくれないし、途中でレイが説明してくれなきゃ、今頃どうなっていたか……」

　溜息を吐く詠を見て、そりゃそうだろうと俺は思う。詠の容姿なら、女子用の制服を着ている方が、よっぽど様になるはずだ。

「いっそ、女子用の制服で過ごしたらどうだ？」

　思ったことを口に出すと、詠がぷくぅっと膨れた。

「あー、それいいかもね。でも、数日もしない内に、そ……そういう趣味の持ち主から、こ……告白されそう……だけど」

　最後の方はちょっと言い辛そうに、頬を赤らめて樹葉が俺の意見に首肯すると、詠は頬を膨らませたまま、ショックを受けたような表情で固まる。しばらく黙って見ていると、硬直が解けたのか、何回か口をパクパクさせた後、顔を真っ赤にして、掠れたような声をしぼりだす。

「ぼ……僕、絶対着ませんからね！」

「こらこら、呉服屋で『着ない』とか言っちゃまずいっしょ」

　呆れたような声が、倉庫の入口から聞こえる。そっちを見ると、やれやれとでも言いたげな顔で、レイが立っていた。どうやら、もう入学式の片付けは終わったらしい。レイも、俺達と同じ格好をしていた。

「あっ、レイちゃん。お疲れー」

「ども」

　俺と樹葉が同時にそう言う。ちょっと遅れて、詠も「お……お疲れ様です」と言った。

「って……ないみたいだねぇ」

　苦笑しながら、レイは倉庫の中を見渡す。ぶっちゃけ、ちょっと物を動かしただけで、お世辞にも片付いているとは言い難い。

「ふ……二人が変なこと言うからです！」

　再び、詠が膨れて文句を言う。

「大方、女子用の制服でも着たらどうかって言われてたんでしょ？」

　レイが、クスクスと笑う。

「まぁ、もう早速『詠ちゃんファンクラブ』なんてものが出来ちゃったしねー」

「そんなの出来たんですかっ？」

「ちなみに、会員ナンバー一番は私だけどねぇ」

「ええっ？　そんなクラブに入らないでくださいよ！」

　詠が、目を見開いて叫んだ。どうやら、詠の学校生活は、中々大変なものになりそうだ。さっき、おそらく冗談で言ったであろう樹葉の言葉が本当になりかねない。

「まぁ、そんなことはどうでもいいとして、さっさと終わらせよー。ロランはそっちのでっかい木のやつを先に運んじゃって」

　レイが、手をポンっと叩いてそう言う。「どうでもよくありませんよ……」と溜息を吐いてぼやく詠は放っておいて、俺達はレイの指示通りに物を運ぶ。流石リーダーのポジションにいるだけあって、指示が上手い。倉庫はあっという間に綺麗に片付いた。

　だが、ここのガサツな主人がこの状態を維持できるとはとても思えない。これが数ヵ月後には最初の状態に近くなると思うと、ちょっと悲しいものがある。

　ここにいる全員が同じことを思ったのか、同時に小さく息を吐いた。